

宇宙へ飛んだチャールズ・シモニ

20 数億円もの大金を使ってロシアの宇宙基地から宇宙ステーションへ飛び立ったハンガリー人が話題になっている。日本ではアメリカの実業家と紹介されているが、れっきとしたハンガリー人である。彼のことは、マルクス・ジョルジュ『異星人伝説』（日本評論社、2001 年、152 頁）の訳注で触れたが、もう一度、紹介しておこう。

インテルの社長、会長を歴任したグローヴは 1956 年にハンガリーから亡命し、後にインテルの創設者とともに事業の拡大に貢献した人物として知られている。当時、グローヴは化学専攻の大学生だった。この時、工科大学で物理学の授業を担当していたのが、シモニ・カーロイである。チャールズの父親である。

1916 年生まれのシモニは、ハンガリーの片田舎で 7 人兄弟の貧しい家庭に生まれた。シモニの才能を見込んだ土地の貴族が、学資を支援し大学で学ばせた。そのシモニが 1952 年に工科大学教授に就任し、国立物理学研究所の創設にも参加し、原子力部門の長になった。ところが、1956 年の動乱で国立物理学研究所の革命評議会議長に任命されたために、動乱鎮圧の後、物理学研究所から追放されることになった。

シモニは優れた物理教育者で、工科大学でシモニの薫陶を受けた人は多い。彼が動乱以後に心血を注いで記した『物理文化史』（A fizika kultúrártörténete）は名著の誉れ高い作品で、人類の創世記から現代にいたるまでの物理的思考、物理学の発展を克明に描いた著作である。動乱以後の不遇時代の自由時間を、この著作制作のために最大限に利用し、個人的なセミナーを開きながら、学生に教授してきた。今、ハンガリーでは、この著作は理工系の学生に必読の物理・哲学書に指定されている。

さて、息子チャールズだが、1948 年生まれで、彼が中学生だった 1960 年代初めに、ブダペスト

の中央化学研究所にコンピュータが設置された。彼は毎晩、コンピュータが空いている時間になるとここに通り、夜通しコンピュータと遊んだ。この頃、ブダペストの見本市でデンマークの会社のスタンドでアルバイトする機会があり、そこで才能を見いだされたチャールズはデンマークに留学する機会を得た。1966 年のことである。

そこから 1968 年にアメリカに渡り、カリフォルニア大学バークレー校で学び、ゴールドン・ムーアやグローヴなどの講義を受けた。その後、スタンフォード大学に学び、ゼロックスではパーソナル・コンピュータ Bravo の文書作成ソフトの開発を行った。マイクロソフトのビル・ゲーツとはこの頃に知り合ったと言われている。

マイクロソフトに移ったチャールズは、表計算ソフト Excel と文書作成ソフト Word の開発責任者として、この商品開発をリードした。2002 年にマイクロソフトを去るまで、ビル・ゲーツの片腕として働いてきた。

雑誌 Forbes の世界億万長者リストには、500 位前後に顔をだしている。2006 年のアメリカの億万長者番付で 374 位にランクされている。ハンガリーには自家用ジェットで帰国する。彼のジェットで、水爆開発のエドワード・テラーのブダペスト訪問を実現する予定もあったが、2003 年に他界した。父カーロイは 2001 年に他界したが、母親がブダペストに存命中である。

父の著作『物理文化史』にドイツ語訳が存在するが、英訳はない。チャールズがポケットマネーを出して英語出版が準備されており、今年あるいは来年初めに出版予定である。

宇宙からの帰還時には、カザフスタンの基地に友人・知人が集合する。宇宙旅行を案じる母親は、ブダペストで息子の帰りを待つ。大金を払って宇宙旅行する息子を理解できないようだが、www.charlesinspace.com は、連日、彼の動向を伝えている（2007 年 4 月 21 日、盛田記）。